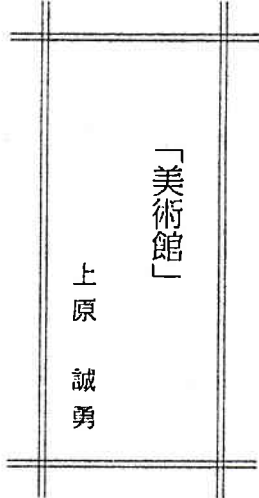


最近になってようやく「美術館」、「文化行政」という声をはっきり聞くようになった。来年初オープンする浦添市美術館、現在、もめにもめている読谷村立美術館(?)、相次ぐ市町村の美術館の動きには、やっ

と時代が来たか、の感がある。本山にうれいことである。しかし、沖縄は今日まで美術の歴史

において伝統工芸の分野は研究されてきたもの、ここ近、現代美術や地域美術の研究の面においては大幅な遅れをこっている。県の美術館建設はもちろんのこと、美術専門の学芸員をお

唐獅子



「美術館」

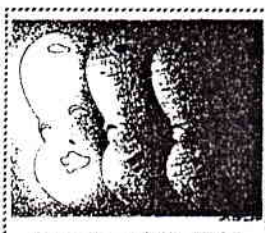
上原 誠勇

いて研究された経緯が全く無いに等しい。三、四年前から街には民間のギャラリーが増え続け、県民の美術に対する関心はかなりの高まりを見せている。そのような状況下で美術文化行

は美術館ができたというものはではない。正に、その「あり方」を根本から問い直さなければならぬ重要な問題を投げかけている。これはもう文化行政のレベルの低さと貧困さから来た歴

館建設と言わざるを得ない。

美術館の基本イメージとして、まず時代のあるいに掛けられ、選ばれた作品が展示されること。市民が生活の中で気軽に鑑賞でき、それらの美術品を通して、時代やその地域の美意識(文化)を享受することができると。また、これらの美術品が大事にされ、永く後世



カット・大久保彰

政は、大変な正念場を現在、迎えていると言える。

今問題になっている読谷村の美術館建設は、ある面商による一画家の作品大置寄贈に端を発したが、極端に言えば、絵があ

り、新聞の紙面から判断すれば、あまりに急ぎすぎた極端な美術

史的タタリと言わねばならぬ。先だってそのあり方、方向性を正すべくシンポジウムが開かれた。

新聞の紙面から判断すれば、あまりに急ぎすぎた極端な美術

に伝えられること等々と思うのである。そして専門の学芸員を置き、美術の研究がされ、企画展ができれば、小規模ながらも充実した美術館が育つに違いない。(画廊沖繩代表者)